其の一　序文「温故知新」

私たちは、私たちの先人が幾世代を重ね、引継ぎ伝え残してくれた伝統的生活文化を享受しながら、今日を生きています。

しかし、若者の都市への流出と少子高齢化という人的なバランスのくずれから、伝統的生活文化の世代間の継承継続が難しくなってきています。とりわけ、文明の進化によるグローバル化という世界の規格化や世界規模の経済発展の進む中で、村の長い歴史に育まれた伝統的生活文化は、風俗習慣や価値観などと共に、マイナーなものと見られ、忘れ去られようとしています。

食の文化を例にみてみましょう。とち餅・よもぎ餅・まなの漬物・うるか・さんま寿司・くさぎなの和え物・大根の漬物・切干・味噌・醤油・豆腐・こんにゃく・ほしいも・かきもち・きりこ・ちまき・おさすり等、昔はどこの家でも食卓に上ったものであります。食材の採集や栽培や加工の行程を経て食品となり家族で食べ味わったものでした。これに季節的・行事的・作法的なものなども加わり、それらが総合して食文化となりました。地域差があったかもしれませんが、どこの家庭でも製造生産されたものであります。そこから「家庭の味」や「お袋の味」、「故郷の味」などのことばが生まれました。「味」は「愛」と置き換えてよろしいでしょう。

昔の人は手間ひま惜しまず時間をかけました。子どもにとって親の背を見る時間が多くありました。そこから、「敬愛の念」や「感謝の念」が生まれ、「働く意欲」も育ったのであります。

現在でも、これらの貴重な食文化を私たちに伝えようとする人たちが居るお陰で、私たちは懐かしい思いで食することができますが、極めて少数派となりつつあります。一般家庭の食生活が和食から洋食へと変化したことや、食材に手間ひまかけるのが時間の無駄と、スーパーから既製の食品を買ってくるのが現代人であります。世代間の生活習慣や価値観の違いは容認するしかありませんが、手間ひま惜しんだがために「家庭の味（愛）」や「お袋の味（愛）」、「故郷の味（愛）」を知らずに育つ人が多くなり、世間では生き方を失った人が増え、不幸な時代となっています。

世代間には、嗜好の違いもあります。高齢者は畑の作物に注目しますが、若者はスーパーの野菜に注目します。高齢者は土のついた作物を好みますが、若者は洗った野菜を好みます。一般論ではないかもしれませんが、高齢者たちは生産者サイドに立ち、若者たちは消費者サイドに立っています。高齢者たちは土と共に暮らしてきました。荒地を開き土を耕し農作物を育んできました。今は、スーパーに行けば、美しく形の良い各地の農産物が並んでいて安く手に入ります。高齢者たちの手は、ごつごつしていて指も変形しています。決してスマートな手ではありません。高齢化の波が押し寄せ、それと共に働き手を失った田畑から荒れてまいります。この現実にいかに立ち向かえばよいのでしょうか。

文化の継承継続は実に難しいものです。ある日ある時、芸能文化を有志が立ち上げました。明神太鼓、民謡と踊り、楽団わんだらなどすばらしい活動と実績を残しました。今、後継者がなく休眠状態であります。復興には創設時以上のエネルギーを要することでしょう。

小学校では、和太鼓の演奏に全校児童が取り組んでいる様子です。迫力のある太鼓の響きと、鈴を鳴らして飛び跳ねる児童の姿が可愛いらしく演奏を盛り上げていました。学習発表の場もあり期待が寄せられています。

池神社の御神輿も伝統行事として、神社を守る氏子総代や若い人たちに保育園児や児童も加わり祭りを盛り上げています。

住吉神社や行者さんのお祭り、お稲荷様・地蔵様・こうどり様・庚申様なども地域に根付いた伝統行事として祭事が営まれています。

社会教育学びの分野では、公民館教室の講師が日本古来の文化の伝承に努めておられます。茶道・書道・陶芸・墨絵・太鼓・着付けなどが、教室生に伝授されています。

私たちの暮らしに密着した文化、先人が世代を重ね、引き継ぎ伝えてくれた文化の中にある心こそ、村びとの心であり、きなりの郷の心として世代間で継承されねばなりません。

少子高齢化、加えて国や地方の厳しい財政状況の中で、三位一体の改革がはじまり、地方分権の時代が進展しようとしています。村びとは、町村合併の道を歩まず、自立の道を選択しました。先行き不透明な世の中でありますが、自らできることは自ら行なう「自助の心」、地域や近隣で助け合って解決できることはその中で行なう「互助の心」を発揮し、行動するときがきました。豊かさと便利さに馴らされ、なんでもしてもらってきた「公助・公共の心」を「自助・互助の心」へと変革せねばならないときがきました。

村の自立とは、みんなの手による村づくりということです。

本年、新成人となられたみなさんに「あなたにとって下北山はどんなところですか。」と、尋ねてみました。「離れてからわかるよさがたくさんある村」「安らぎのある良い村」「今のままの下北山をいつまでも」「景気の低迷、深刻な過疎化の中だからこそ他にはない村のよさを守りつづけていただきたい」「たくさんの人が帰ってきたり、来たくなるむらづくりをしてほしい」「緑の郷、最高です。時間がゆっくり流れてますねえ」

小さな村でありますが、国道二本に県道一本、トンネル三つで村を環状し、あっという間に各大字が巡回できます。こんな便利な村が他にあるでしょうか。熊野に近く、海洋の影響を受け、気候は温暖、民情は豊かで温かい人が住んでいます。山村であるが、空も広く平地もたくさんあります。不動トンネルの開通で三重県・和歌山県への距離がより近くなり、隣村との近所づきあいができるようになりました。

ケーブルテレビの整備でデジタル放送への対応やインターネットによる高速通信が可能となり、高度情報社会への道が開けました。

また、昨年七月に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産に登録されました。本村では、大峯南奥駈道と太古の辻から前鬼三重の滝までの修行道が対象になります。

奈良県の南の玄関口、前面に熊野灘を眺め、奥座敷床の間に世界の文化遺産というお宝を持つ下北山村。そこに、縁あって住んでいる私たち。温故知新の心で、何とか知恵を出し合って、この難関に挑もうではありませんか。